

JOMA 通信

Japan Overseas Missions Association

海外宣教連絡協力会

公報 No.49号

JOMAの特異性を生かして

JOMA書記
佐々木 正明

御存知のように、JOMAに関わって来た方々は、ここ数年、JEAとの関係についていろいろ話し合い、意見の調整を進めてきました。JOMAの働きとJEAの世界宣教部門の働きには、重複するところが多い一方、JOMAにはJOMA独自の特異性もあることから、JOMAとしては、JEAに協力会員として加入しながら、JOMAとしての独自の活動を継続して行くということになりました。神様が今まで以上にJOMAを祝福し、用いてくださるよにと祈るものです。

ところで、最近、地球がますます小さくなっています。交通機関が発達し、時間距離、経済距離が短くなって久しくなりますが、いまや、さらにIT革命です。このような世界の変化に伴って、宣教の世界にも変化が起きています。本来、宣教の基本的理念は、周囲の状況の変化に左右されるべきものではありませんが、不完全な人間である私たちは、周囲の状況に促されて聖書を読み直し、そこで初めて聖書の言っていることを理解するところがあって、宣教の基本的考え方にも、そのような変化が起こりつつあるのが現状です。

地球が小さくなって、このところ宣教の

分野で話題になっているのは、宣教の超教派化と国際化です。自分たちの教団教派、あるいは国や文化に捕らわれず、全世界の教会が協力して、宣教の働きを推し進めて行くべきだというもので、それ自体は、聖書の理念に沿った考え方で素晴らしいことです。そういう中で、しばしば「チームワーク」という言葉が用いられます。宣教と言うのは個人の働きではなく、多くの人の力を結集して進めて行くものだとということで、「パートナーシップ」が強調されるわけです。西欧個人主義の理念に沿って行なわれていたとさえ言われる、最近までの宣教の考え方に比べると、格段の進歩と言えます。

しかし、これとて、聖書の教える宣教のあり方には、まだ足りないように思えます。チームワークでは、チームのメンバーに選ばれたもの同志は、パートナーとして協力しますが、大部分の人間は観戦者、傍観者となってしまいます。宣教師たちの団体、あるいは伝道団体として、その中で働く者たちがチームワークを保つことは良いことでしょう。しかし世界宣教の働きは、チームに選ばれた特殊な人々に働きではなく、教会全体の働き、信徒全員の働きなの

です。いわば「ボディーマニストリー」、キリストの体全体の働きです。宣教師だけが宣教に関わるわけではありません。聖霊がキリストのみ体にバプタイズしてくださった、すべての信徒が、具体的に宣教に参加していける宣教の形を作り上げる。これこそが急務です。

私たち、日本の教会のクリスチャンたちが、海外宣教という働きを、誰かに任せておけばそれで事たりる、教会や教団の一部門の働きとしてではなく、教会全体、すべての信徒の使命、生きる目的と捕らえて参加して行けるようにするのが、今もっとも必要なことではないでしょうか。■

る。働きは区会内の教会を建てあげる奉仕と日本語での家庭集會を主として伝道に従事している。

[その他の活動]

台湾への伝道のための訪問団を、今まで数多く派遣し、日本からの牧師や信徒の奉仕と交流の機会をもってきた。と同時に、台湾からも日本の教会での研修や神学校の学びのための機会をもつて、相互の交流の機会を設けることによって、宣教の協力と前進を計ってきた。■

事務局の電話番号は：

- ・ Tel.045-891-7769 Fax.045-894-2121
- ・ 事務担当は：坂庭裕子姉です。よろしくお願ひします。

■ '66年・台湾宣教協力会 ■

現・アジア福音宣教会

[歴史]

1962年以来、台湾山地（先住民）10部族にある諸教会の巡回、訪問伝道を手がけていた松元茂宣教師を支援するために、1966年「台湾宣教協力会」を発足させた。翌年、宣教のビジョンを拡大させ、台湾のみならず、全アジアに宣教の働きを進めるべく、「アジア福音宣教会」と変更し、今日に至っている。

[働きの概要]

特に台湾基督長老教会を窓口として、先住民教会での働きを中心に宣教を進めてきた。1967年以来、4家族、4人の独身の宣教師を派遣し、諸教会巡回伝道、神学校教師としての奉仕を担ってきた。特に、先住民の諸教会への巡回伝道では、伝道集會や牧師のための研修会での奉仕を積極的に担ってきた。

[現在の働き]

しかし、現在は松元節子師一人が、台東市でピューマ区会での働きに従事してい

■ 30年前台湾宣教着手 ■

東洋ローアキリスト伝道教会

私たちの教会から宣教師を送り出したのは、今から30年前のことでした。当時、宣教師を送り出すにあたり、必要なこともわきまえずに、日本の手話が通じる地は台湾と韓国しかなかったため、何の備えもないまま一人の宣教師を派遣しました。派遣された宣教師も現地でも中国語を独学で学びつつ、宣教をしました。その途中で一身上の都合で帰国されましたが、その後を引き継いだ宣教師も短期間のうちに帰国となりました。

1982年、第三人目、使命を受けた小野寺義尚宣教師が台湾へ渡り、台北教会、台中教会、台南（高雄）教会の設立に努力され、会員60名位に成長しました。その宣教師も過労から体調をくずされて、11年間の滞在の後、帰国となりました。その間に、現地のろうあ者牧師が起こされたので、その人に任ねて、体調の悪化を理由に帰国し、台湾のろうあ者だけで宣教活動に奮闘することになりました。

1988年中華聾人基督教会と東洋ロー

ア・キリスト伝道教会は姉妹教会となり、経済的なサポートを続け、それだけではなく、年に3回程度修養会の講師の支援をしています。現在は、台北教会の信徒が香港にろうあ者の教会を開拓し、自立教会にまで成長しました。香港の教会の中心的な奉仕を担った兄弟は、香港出身者でありましたが、台湾で学んでいるうちに福音にふれて決心し、帰国後、香港でキリスト教を拓めることになったのです。現在、香港には、一人の牧師と二人の伝道師がいますが、伝道師の一人は健聴者で、信徒は90名位集っています。

台湾の教会も、又、香港の教会も、教会組織がまだ充分ではないので、そのために神学的な養いや具体的援助協力が必要とされています。台湾では教会用のビルを購入し、宣教の拠点が出来たので、今後台湾国内だけでなく中国本土への宣教のビジョンも与えられているので、そのためお祈り頂きたいと思っています。■

■都市原住民と共に■

日本イエス・キリスト教団

二宮 一朗

現在、わたしは、日本イエス・キリスト教団が宣教協約を結ぶ台湾基督長老教会に属し、台北にある同教団台北東門教会において都市に住む台湾現住民族のために開拓伝道をし、また、同教団原住民宣教委員会の常務委員として、同教団への宣教協力をしています。

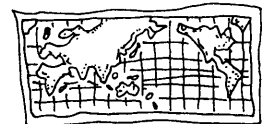
台湾は、大陸の漢民族が大量に移民して来てはいますが、自らを「原住民(=元々すんでいる民)」と呼ぶ先住民族が40万人を超え、約10民族、全人口の約1.7%を占

めています。山間部と中心とする原住民地域には、戦後の宣教活動によりどの村にも原住民教会があり、多くの原住民が信仰を持ち、生活もケアされてきました。しかし、ここ数十年、約10万人の原住民が、就労や就学のために都市に移住しています。そこで問題は、人は都市に移住しても原住民の教会堂は移転しないため、本来尊厳ある原住民も、漢民族中心の都会では、漢民族の教会には行きたくないばかりか、信仰を失い、酒などで生活も乱れ、民族のアイデンティティーさえ失いがちです。台北市内の長老教会を例にとれば、アミ族の教会こそあれ、他の原住民族には、原住民のための礼拝が全くありませんでした。

「この町には、わたしの民が大ぜいいる。」「来て、わたしたちを助けて下さい。」(使徒 18:10、16:9) これらのおことばの召命を受け、6年前にわたしは台湾語を話す台北東門教会に着任し、原住民の共通語である中国語により、都市原住民のための開拓伝道をゼロから始めました。

原住民は流動性が高く転居して行く者が多い中、この群れに来て救われた者も多く、毎週日曜日午後4時半からの各族連合性の原住民礼拝、水曜日の祈禱会のほか、台北市・県内の7つのケア・センター(地域の信徒宅)で、毎晩のように祈禱会や集会をしています。

どうか、この群れが成長し、更に多くの都市原住民に宣教できるよう、お祈りください。



詳細は：

二宮一朗宣教師を支える会事務局まで
〒004-0846

札幌市清田区清田6条一丁目 1-23

日本イエス・キリスト教団

札幌羊ヶ丘教会内

Tel.(011)883-3790、Fax.(011)883-4974 ■

'69年

■アジア宣教会を通し■

基督兄弟団

大塚 望

台湾との交わりは、現日本イスラエルミッション宣教師川津旭師が、1969年頃、アジア宣教会を通して短期宣教師として、台湾長老教会の原住民教会を巡回奉仕したことに端を発する。帰国後同師は、教団がその働きに加わることの必要性を理事会に進言し、1970年に名古屋教会の毛戸師を同宣教会を通し同宣教会が募集した夏季短期宣教師として一ヶ月間派遣し、毛戸師は学びと交わりのためにその後自費で2年奉仕に行った。1971年同じ形で教団から大塚が派遣され高雄ブヌン族とパイワン族の教会を巡回奉仕した。奉仕後、当時台湾長老教会伝道部長の蘇天明師と会う機会が与えられ、教団が直接台湾との交わりを持つ為には、どんな手続きが必要かを聞いた。

帰国すると、台湾長老教会と直接交わりを持つことを以下の理由で理事会に進言した。巡回した原住民教会では、

- ① 日本人キリスト者との交わりを強く望んでいる。
- ② 何処の教会に行っても自由に信じるところを日本語で説教することができる。
- ③ 日本が統治していた時代の人達が活躍している間に、交わり奉仕する必要がある。
- ④ 兄弟団は他国の教会との交わりがないので、正式に交わりを持つ教会が必要だ。(身元の分からない外国人牧師に、指導者達がだまされ、その影響が中央から地方に及んだことも有った。)
- ⑤ 短期間でも宣教師として危険を侵して福音を伝え、他民族に仕える働きが出来る。

理事会は、更に状況を把握するために、1972年、理事であり伝道部長の(海外伝道部長は組織に無かった)橋本藤一師を派遣した。

1972年正式な交わりを申し込んでいた教団に、長老教会から、申し入れを受諾するとの連絡があり、同年4月、交わりを始めるにあたり感謝礼拝を台南神学院で挙行するので、代表を送ってほしいという連絡があり、池本金三郎師を派遣した。

台湾宣教師・木下理恵子

台湾長老教会との交わり

藤波勝正

1 交わりに至る主な経過

1962年(昭和37年)に川津師が台湾宣教に派遣されたが、台湾長老教会との交わりは1966年(昭和41年)に川津旭師がアジア宣教会の訪華団に参加したことから始まる。当時台湾を訪れることができるのは、野口師が主宰するアジア宣教会を通してだけであった。教団は、海外宣教に重荷を持ち、献身の意思を表していた川津旭師を教団派遣として承認し、経済的援助を与えた。続いて毛戸健二師が1970年(昭和45年)、大塚師が1971(昭和46年)に参加したが、教団とアジア宣教会との見解の違いが生じ、台湾長老教会と関係を結ぶことができないか検討が始まった。1973年工藤公敏師、1974年高野秀夫師、1975年佐藤栄一師まではアジア宣教会を通しての一ヶ月間に及ぶ短期宣教活動であった。

1975年4月に海外宣教部の川津部長から台湾長老教会との友好関係樹立の意見書が出された。同年の秋の聖会には来日中であった高俊明総幹事が、視察奉仕のために教団の大会に出席して提携の話し合いが具体化し始めた。兄弟団としても1976年台湾との友好関係の交渉を川津師に任ずるとの議決のもとに同師が交渉に当たり、1977年4月の長老教会総会で決議するとの約束を得た。1979年姉妹関係樹立記念礼拝のため池本金三郎師が訪台し、関係樹立の喜びを確認しあった。同年6月に高俊明総幹

事の来日に関する話合いが理事会でなされている。その間1976年(昭和51年)に台湾宣教で大きな働きをした鐘子時牧師が兄弟団を巡回伝道し、奉仕に当たった。このような経過の中で台湾基督長老教会と基督兄弟団は深い交わりを開始した。姉妹関係成立後は、特別な事情がない限り毎年、相互の総会に参加し合いながら互いの理解を深めてきた。

2 宣教協力の提携交渉

1979年(昭和54年)に宣教協力に関する同意書が長老教会から提案され、理事会ではこの提案を受け入れ、同年に開催された総会に提出した。様々な議論の後に、政治的活動に兄弟団は協力できないとの項を加筆するとの決議がなされ、その交渉が小平師に一任された。そこで、小平師が提携の交渉のために訪台したが、合意点に達することができず、同意書交換は中止するに至った。同意文書の主旨を生かしながら交わりは深まり、良い関係が継続していた。提携10年を迎えるに当たって過去の文章を参考にしつつも、今ある交わりを確認する宣教協力の交換が必要であるという志が与えられ、1986年に再び協議を開始することが3月理事会で議決がなされた。この提携交渉に加藤宣教局長が当たり、1989年2月台湾との宣教協力について提携文が理事会で承認議決され、同年総会で台湾との宣教協力について議決した。早速宣教局長から理事長になった加藤理事長と大塚総務局長が4月に訪台して台湾基督長老教会との宣教協力文書に調印し、両者の関係が確固たるものとなった。

3 短期宣教師派遣

アジア宣教会を通じての短期宣教の奉仕は提携後も引き続き行なわれ、1977年(昭和52年)に台湾長老教会総会では、兄弟団との提携の議決がなされ、同年の8月に中島一碩師が提携後の短期宣教師第一号として訪台したが、藤波勝正(1978年)、高橋養二師(1979年)、滝伍平師(1980年)、

沢啓一師(1981年)、市川越男師(1984年)、毛戸健二師(1985年)、後藤近師(1986年)、工藤公敏師(1987年)、高地博夫師(1988年)、沢啓一師(1989年)、鶴飼克巳師(1990年)、畑中幸三師(1991年)、梶原陸尚師(1992年)ら、現在まで多数の牧師が短期宣教師として奉仕している。

4 原住民牧師の短期留学生受入

昭和53年にブヌン族の伍良茂師から毛戸健二師を通して聖書学院で学びたいとの願いが出された。教団は受入の方向を決め、海外宣教部長川津師が本部の要請に従ってその入国手続きのお手伝いをし、昭和53年11月から一年の予定で入学が許可され来日した。同師の日本での学びが兄弟団及び長老教会の一つの良い経験となった。戦前に日本語教育を受けた原住民牧師の再教育のために日本での学びの必要性が山地牧師から提案された。互いの交わりと山地の教会のために基督兄弟団聖書学院での短期留学制度の必要が認められ、山地宣道委員会と話し合いをした。わが教団でも理事会をはじめとして話し合い、教役者会で短期留学が有効であるならば、受け入れるとの了解を得た、そこで長老教会総会と兄弟団が山地牧師のために短期留学制度を設けることの結論を得た。まず、昭和58年3月に長老教会から推薦されたブヌン族の司光治牧師、アミ族の洗憲治牧師を皮切りに毎年二人ずつ短期留学生として受け入れてきた。(これまでに34名の先生方が留学された。)

5 山地聖歌隊の奉仕

台湾山地の聖歌隊を日本に派遣したいという山地宣道委員会の提案を喜んで受け入れ、林建二山地幹事を団長にした9名の台湾山地聖歌隊「佳音詩歌団」が1980年4月29日から5月28日まで兄弟団の各教会で讚美と証しの奉仕をした。奉仕した教会は、西宮、尼崎、大阪、網干、大和、名古屋、一宮、上田、小田原、三ツ境、横浜目黒、成増、下館、真岡、仙台、山形、米

沢、根本、竜ヶ崎、羽鳥の各教会であった。合計の参加者は約2,900名、新来会者は約550名で、交わりと宣教のために大きな働きがなされた。団員は帰国するに際して、鉄道会館ルビーホールで感謝のひとときを持ったが、感謝と感激にあふれる集まりであった。

6 青年部訪台団と婦人部訪台団

1979年に高橋養二師が大阪教会の信徒1名を同行して短期宣教師として訪台した折に、日本と台湾のキリスト者青年の交わりと親善のため、青年による奉仕についての話し合いがなされ、1981年7月25日から2週間にわたって、池原三善師を団長として青年たちが奉仕した。副団長には沢啓一、堀由紀子の両氏、団員は11名であった。

1984年8月には、台湾長老教会婦人会創立60年のお祝いと両教会の交わりのために、兄弟団婦人部を代表して加藤美知子、佐藤香代、瀬戸秀子、福富まち子、藤波喜久子の諸師が訪台した。奉仕の中心は山地教会の巡回訪問であった。その奉仕のために呂金俊牧師夫妻が大きな働きをしたくださったことは忘れることができない。

7 林建二牧師招聘と毛戸師の奉仕

交わりが深まってきた台湾の協会を代表して、山地幹事林建二牧師を1980年の秋の聖会の講師として招聘した。その後、同師は白糠、網走、常呂、美幌、北見栄光、旭川、小田原、上田、名古屋、一宮、横浜の各教会と聖書学院で奉仕した。

1983年には山地宣道成立30周年記念培靈大会のため、台湾山地宣道委員会によって毛戸健二師が特別講師として招聘された。同師は、大会および平地や山地の教会で良い奉仕をした。

8 高俊明総幹事逮捕

1980年4月24日に高俊明総幹事が逮捕されたので、藤波勝正総務局長がお見舞いと励まし、および奉仕のために急遽訪台し、総会幹部と懇談の時を持った。高俊明夫人にもお会いし、お見舞いを言った。高

牧師は、1984年8月15日に釈放され、国内外からの支援に対する感謝の談話が商政宗総会議長から発表された。わが教団からも、小平理事長名でお祝いの電話をかけ、共に喜んだ。1986年8月の夏季聖会で高牧師が説教と挨拶をされ、政府からの弾圧をうけながらも主の証しを立てたことを聞き、主の御名を讃美した。

以上の文章は約5年前に教団内資料としてしたものであるが、台湾長老教会との交わりは、一昨年は兄弟団の婦人牧師たちが訪台、昨年は台湾の婦人牧師たちが来日し、さらに昨年地震の際に援助協力するなど、現在に至るまで良い交わりが続いている。

■台湾での宣教師の可能性■

OMFインターナショナル

高度成長を続け、今アジアの中で一番経済が安定しているのではないかと言われている台湾(中華民国)。と同時に、初めて台湾人の政党である民進党から陳總統が選ばれ、台湾独立を懸念する中国との関係は台湾の人々が長い間抱き続けた恐れに更に拍車をかけています。その恐れ故、今までどれだけの人が国外に移民して行ったか知りません。

その台湾で宣教を続けているOMFは現地の教会、クリスチャンたちと協力しながら今、特に四つの宣教分野に焦点を絞っています。

第一はブルーカラー伝道——工場労働者、デパート、商店の店員、市場や建築現場で働く肉体労働者伝道です。以前学生伝道の祝された台湾の現在の教会というと、知識階級の人々の教会多く、こうした人口の大半を占める人々には、まだ福音は浸透していません。こうした人たちは、今も

台湾の伝統宗教を熱心に信仰し、家庭内の問題も多いです。

第二は学生伝道。それも留学・移民の多い大学生伝道ではなく、高校生・専門学校生を中心とします。十代の青少年の非行率が非常に高い台湾ではそうなる前の青少年、更に児童伝道の大切さが見なおされています。

第三は神学校教育。既に良い教会や働き人の多い台湾では、十数年前から超教派で二千年に向けて、台湾キリスト教会全体としての信徒数、教会数、宣教師数の目標を掲げて、一致して伝道してきました。そのため開拓中や開拓予定の教会も多く、更に多くの働き人が必要とされています。そうした将来のクリスチャン・リーダーの育成です。

そして、第四は社会の底辺にいる人々への伝道——ホームレス、依存症患者、暴力団、売春婦、非行少年、エイズ患者ホスピスと、まだ台湾の教会が始めていない分野の伝道です。又、こうした働きは時間や労力がかかると共に、大きな成果がすぐには見られません。宣教師が始め、台湾の教会にビジョンを伝えていく事が可能です。■

宣教師館完成のお知らせ

イムマヌエル総合伝道団では、帰國中宣教師の住処のために、千葉県我孫子市に「ミッション・ハウス」を建設しました。同教団だけではなく、広く、福音派の諸宣教師の為にも用いられます。

来る11月20日(月)午前11時から献別式が同所(我孫子市白山2-14-5)で行われます。JOMA関係のどなたでも、ご来会を歓迎いたします。

詳しいことは、03-3291-1308
(イムマヌエル本部)にお尋ね下さい。
(毎水曜日が執務日です)

「ふあつつMK?」第2弾

日本ウイクリフ聖書翻訳協会
メンバーケアー 永井敏夫

ひとつの窓

宣教をとらえるに、もっとさまざまな視点があつていいと思う。宣教報告というと、従来は宣教師の奉仕の内容とその進展にポイントが置かれることが多かった。今回は、宣教師子女(以下MKと呼ぶ)という「ひとつの窓」から宣教をとらえてみたいという願いで、2月の集会を受けて開催された。9/30(土)の午後、OMFインターナショナルの素敵なおホールをお借りして行われた集いの内容を、以下ポイントをまとめながら紹介してみたい。

MKの持つイメージ

MKを「みじめでかわいそう」、「みつともなくて変わっている子ども」から「未知数と可能性、そして感性のある子ども」というコトバ遊びから、肯定的なイメージが紹介された。また、「海外子女」「帰国子女」、TCK(第三文化を持つ子女)、「異邦人」そして「マージナル人間」というコトバと、「宣教師子女」を比較しながら、「既存の枠に収まらない新たな可能性を秘めている存在」としてMKをとらえた。

言語の選択

MKが、自分の家庭では日本語を話し、外ではその国の国語や滞在地域の言語で友達と遊び、インターナショナルスクールでは英語で授業を受けるという例も多い。彼らは日本語の通信教育をする場合もあるが、英語の課題(学校)と日本語の課題(通信)の狭間で、ふたつの言語での大変さを感じ、英語をメインに選択していくこともある。ひとつの選択には、大きな決断が伴う。

新聞と本

日本語の新聞が、夫婦間での話題に役

立った証しがあった。また、現地の日本人学校の好意で図書館から定期的に本を借り、MKがその中から選択して読むことができた恵みの話もあり、環境作りの大切さが再認識された。

天国と暗黒

MKには、宣教センターや村の滞在中の多くの思い出が蓄積されている。楽しい思い出が多ければ、「天国に一番近い」とまで表現する。それに反して、(日本への帰国時期や、MKの年齢にもよるが、)日本での生活を表現するのに「暗黒」という語を使うこともある。日々いろいろなことを経験しながら、自分は何者なのか、どこに属するのかと問いかけているMKがいる。

次世代への資源

「MKは次世代への資源」という見方も紹介された。MKを一般化することは避けたいが、統計的に言うとMKの宣教師・牧師などになっていく数字はとても高いと言うデータが出ている。

神様に立ち返る時

あるMKは、日本に戻ってから学校生活や友達との交わりを楽しむ反面、ノンクリスチャンとの差が無い自分に気づき始めた。神様に愛されている自分と、自分の中に神様のことを考えられない部分があることの葛藤もあったと言う。やがて大学生になってから彼女は、イエス様の元に向き直り、立ち返る。海外での経験、自分の英語力などを、もう一度神様に差し出して仕えていこうとする姿は、神様にとって、また両親、そして祈り手である多くのキリスト者にとっても喜びであるだろう。

次のような機会の広まりを願っています。是非、ご意見、ご質問、アドバイスを お寄せください。

*MKやその友人などが集まって、思いを分かち合える機会

*MKや宣教師(両親)が、自分の思いを言葉にして書き記す機会

*教会の宣教委員、教団の宣教委員会

や宣教団体の担当者が、宣教師ケア、MKケアという観点で集まり、研修できる機会

*MKを含めた宣教地の子どもたちと、日本の教会学校の子どもたちとの交流の機会

JOMA以外にも、宣教師を派遣している諸団体が存在しています。21世紀には、上記のような集いがこれらの団体にも呼びかけられ、共に「宣教師とその家族の心の声」に耳を傾けていけたらと願っています。

JOMA 世界宣教地図

今年、6月の沖縄で開催された「日本伝道会議」の折に合わせて「JOMA世界宣教地図」の最新版が発行されました。

皆様の教会では、掲示板に、この「世界宣教地図」が掲げてありますか。もし、古い地図が掲げてあったら、最新版を買い求めて、新しいものと置き換えてくださるようお願いいたします(定価一枚¥200.-)。

JOMA 総会

- 日時：2001年4月16日(月)
a.m. 11:00 - p.m. 16:00
- 会場：お茶の水OCCビル
4F会議室
- 連絡先：JOMA事務局
担当：坂庭裕子姉
- プログラム：後に連絡します。

発行：海外宣教連絡協力会
 発行者：安海 靖郎
 住所：244-0842
 横浜市栄区飯島町2441-10
 Tel.045-891-7769
 Fax.045-894-2121
 郵便振替：海外宣教連絡協力会
 00160-7-106631